

尾崎日報

尾崎日報社

制作課題

～テーマ～

前橋天神山古墳

天神山古墳破壊が

突如出現したブルドーザー

前橋市広瀬町にある前橋天神山古墳。形状は鍵穴型で、お馴染みの前方後円墳である。しかし、現在は前方後円墳の中心部である粘土槨しか残されていない。

昭和四〇年次の話し合いでは、古墳全体を保存する見通しが立っていた。多くの関係者が古墳保存のために尽力したが、四三年六月、突然建設機械によって古墳の前方部が削られてしまったのだ。削平は当時、広瀬団地の建設のための工事作業によるもの。その後遺品の出土により、同年七月には尾崎喜左雄氏の研究室と関係者をもって緊急の調

査が実施された。この前橋天神山古墳だが、かつての全長は一二九m。四世紀前半につくられた初期前方後円墳で、東国最大の大きなを誇る。大和王権の王の墳墓として作られたとされる。崇神陵古墳などと類似しており、王権と政治的な結びつきが強かった八幡山古墳の首長の後継である、毛野国の勢力の墳墓と考えられている。



1946年当時の天神山古墳
粘土槨のみ現存(出展:国土地理院地図)

緊急調査！！

副葬品を多数発見！



東京国立博物館で展示されている出土品

ブルドーザーでの古墳破壊に伴い七月に始まった緊急調査であったが、四四年三月中旬から主体部の本格調査が始まり、四月三日にこの三角縁神獣鏡が発見された。この時尾崎氏は生涯で初めて、発掘調査にて鏡を取り上げることができた。また、これより一年前の玉村古墳群調査において同じく三角縁神獣鏡が見つかった際の日付も四月三日と同日である。前橋天神山古墳で見つかった副葬品は銅鏡五枚をはじめ、紡錘車(ぼうすいしゃ)形石製品、銅鏃(どうそく)、鉄製武器類、鉄製農具類など大変豊富であった。現在出土した遺物は、東京国立博物館で保管されている。

毛野国造に上毛野氏

強硬姿勢で蝦夷けん制

上毛野氏は両毛地方を本拠に一万基ほどの多数の古墳を築造した勢力。その権勢から「東国の王」と呼ぶ研究者もある。

本流は「上毛野君」で、武天皇の代には朝臣の姓が与えられた。当時の上進では第九位とされており、飛鳥時代の土豪にしてはかなりの高位にあったといえる。

『日本書紀』によれば、上毛野氏は崇神天皇の皇子である豊城入彦命が先祖とされ、蝦夷を平定後、そのまま東国に土着したという。

なお、子孫は七世紀中葉の白村江の戦いに身を投じ、陸上戦の主力部隊指揮官として新羅側の城を落とすなど、大きな戦果を挙げている。

「毛野」の由来

名称の起源については定かでないものの、尾崎喜左雄氏は「本来毛人(蝦夷)が住んでいた原野」であったことに起因するとしている。

この他にも、上毛の広大な沖積平野の生産力を揶揄して「食野(毛野)」とした説も存在するが、尾崎氏によると、当時はまだ農業が盛んでなかったとして前者を提唱している。

尾崎博士と古墳

～毛の国を
たずねて～

今こそ古墳で名高い群馬県だが、その契機は思いの外知られてない。

昭和の初め、資料整理のため来群することとなった尾崎氏。戦後は群馬大学教授として、考古学研究に注力した。経済成長の熱りも冷めやらぬ中、研究室の学生とともに県内各地、延べ三〇〇基以上の発掘に携わった。この尾崎氏こそ古墳王国 群馬の立役者と呼ぶにふさわしい。■重機のなかった時代、ひたすらに手作業で土を掘っていく。その大変さゆえ、遺物が出土した時の喜びはさぞかし大きかったであろう。■尾崎氏は七三歳でその生涯に幕を閉じた。しかし、没後四五年以上たった今でも、遺した数々の発見や逸話が色あせることはない。そんな尾崎氏の愛した古代に思いを巡らせ、上毛の面影を追ってみてはどうか。

(毛国特派員)



生前の尾崎氏(上図)

神獣鏡は二面にて掲載

ねえ、



“ドキッ”とした？

神國を共に、古氏と共に
OZAKI

もっと知りたい！三角縁神獣鏡！

三角縁神獣鏡とは

三角縁神獣鏡は銅鏡の一種である。銅鏡と呼んでいるが、実は材料は銅とすずの合金である青銅だ。一般的に我々が見る鏡はくすんだ青緑色をしている。発掘した直後の鏡も青緑色だが、とても鮮やかな青緑色である。しかし、この色は鏡本来の色ではなく錆の色なのだ。今は鏡本来の色を見ることはできないが、作られた当時は黄金色に輝いていたと思われる。三角縁神獣鏡の裏面には模様だけでなく銘文も彫られている。例えば、前橋天神山古墳から出土



【写真】三角縁神獣鏡 鏡背
東国文化副読本

三角縁神獣鏡の特徴 形や模様の意味は？

三角縁神獣鏡の特徴は主に二つ。一つは、鏡の縁の断面が三角形であること。三角形である理由には、三角形にすると構造上作りやすいという説や、神聖な場所を囲む瑞垣を模倣したといった説がある。もう一つは神仙や霊獣が主な模様として描かれていることである。前者は西王母や東王父などの仙人、後者は白虎や龍などの空想上の獣である。どちらも中国の神話に登場するキャラクターだ。鏡の直径は二〇～二三cmほど。その他に表面が凸状に膨らんでいることが特色として挙げられる。



【写真】三角縁神獣鏡
東国文化副読本

▲三角縁神獣鏡
(玉村町、川井稲荷山古墳)

いうものだ。魔鏡現象とは鏡に光を当てた時、反射した光が鏡裏面の模様を映し出す現象のことである。この現象は裏面に凹凸があり厚みが不均一な鏡を研磨する際、鏡本体にひずみが生じて厚い部分がかすかに凹面になり、薄い部分が凸面になって反射光にむらが出ることによって起こる。昔の人々はこのよう現象を引き起こす鏡に特別な力を感じたのだろう。

三角縁神獣鏡の謎 と群馬県

三角縁神獣鏡は古墳時代前期の古墳から出土することが多く、現在まで

中国製？日本製？ 今なお議論続く

鏡には中国語の漢字銘文や中国の神像・獣像が描かれている。そのため当時魏の鏡職人が倭に送るため特別に作ったものだという説がある。また、日本で出土した鏡には製造技術や模様の表現が優れているものと下手なものがあり、前者が中国製、後者が中国のものを模倣した日本製ではないかという推測もされている。一方、鏡は中国や朝鮮では出土せず、日本国内でのみ出土しているため倭で作られたという説もある。優れたものは魏から渡ってきた鏡職人によって作られ、下手なものは日本各地の職人がそれらを模倣したものと考えられている。

に五〇〇面以上が出土している。鏡には中国の漢字銘文や神像・獣像が彫られており、なかから半数の発掘調査には、中国や朝鮮では発見されていない。日本国内のみの出土に限られているという点が謎である。この三角縁神獣鏡であるが、次に示す二点は当時の群馬県の国内における立ち場を考察する上での根拠となり得よう。第一、群馬県は非常に多くの鏡が出土している地域である。このことから群馬県が大和朝廷によって重宝されていたのではないかと推測できる。これまでに、東日本地域からは一七枚の鏡が出土している。そのうち二枚は群馬県に属する。以上二つの事柄を鑑み、中央勢力にとつて群馬が重要な地であったと考えられる。